

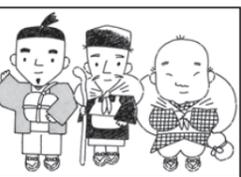
更級への旅

松尾芭蕉が歩いた

更科紀行街道の今・その五

の両方の性格を兼ね備えた感じがしてききました。このタイプの特徴は、気さくで気安くておせっかい、そして風変わりになにか面白味があり、記憶に残る人が多いことです。憎めない。ふとその人の存在を思うと、気持ちが悪くなるようなこ

「旅は人生」と芭蕉は確信？



さらしなの里、姨捨山の月見んこと、しきりにすすむる秋風の心に吹きさらされて、ともに風雲の情をくるはすもの、またひとり、越人といふ。木曾路は山深く道さがしく、旅寝の力も心もとなしと、荷子奴僕をして送らす。おのおのこころさし尽くすといへども、駅旅のこと心得ぬさまにて、ともにおぼつかなく、ものごとのしどろにあとさきなるも、なかなかをかしきことのみ多し。

何々といふ所にて、六十ばかりの道心の僧、おもしろげもをかきげもあらず、ただむつむつとしたるが、腰たわむまで物負ひ、息はせはしく、足はさきむやうに歩み来たれるを、伴ひける人のあはれがりて、おのおの肩にかけたる物ども、かの僧のおひね物とひとつにからみて、馬に付けて、我をその上に乗す。高山奇峰、頭の上におほひ重なりて、左は大河ながれ、岸下の千尋の思ひをなし、尺地も平らかならざれば、鞍のうへ静かならず。ただあやうき煩ひのみやむ時なし。棧橋・寝覚など過ぎて、猿が馬場・立峠などは四十八曲りとかや。九折かさなりて、雲路にたどる心地せらる。歩行より行く者さへ、目くるめき魂しほみて、足さだまらざりけるに、かの連れたる奴僕いとも恐るるけしき見えず、馬の上にてただねぶりにねぶりに、落ちぬべきことあまたたひなりけるを、あとより見上げて、あやふきこと限りなし。仏の御心に衆生のうき世を見たまふもかかることにと、無常迅速のいそがはしさもわが身にかへりみられて、阿波の鳴門は波風もなかりけり。

夜は草の枕を求めて、昼のうち思ひまうけたるけしき、結び捨てたる発句など、矢立とりいでて、灯のもとに目を閉じ、頭たたきてうめき伏せば、かの道心の坊旅懐の心うくて物思ひするにやと推量し、我をなくさめんとす。若きとき拝みめぐりたる地、阿弥陀のたふとき、数をつくし、おのがあやしと思ひし事ども話しつづくるぞ、風情のさはりとなりて、何を言ひいづることもせず。とてもまぎれたる月影の、壁の破れより木の間がくれにさし入りて、引板の音、鹿追ふ声、とろとろに聞こえける。まごごにかなしき秋の心、ここに尽くせり。「いでや、月のあるじに酒ふるまはん」と言へば、杯持ち出でたり。世の常に一めぐりも大きに見えて、ふつつかなる時勢をしたり。都の人は、かかるものは風情なしとて、手にも触れざりけるに、思ひもかけぬ興に入りて、晴碗玉冠の心地せらるるも所がらなり。



四圍八十八ヶ所の
杜所を巡らたおりの「と」置置ろ
がしという厳しい道を雨の中歩き
石畳のけに目をそめておれたけた
ときたにわたり鳴き声がこけ
こつと聞えましてもこつと
こつと聞えましてもこつと
こつと聞えましてもこつと
こつと聞えましてもこつと

おっしやんでありおっしやんでもある「道心の僧」

松尾芭蕉の「更科紀行」は、芭蕉のほかの紀行文と違い歩いた土地ごとの記述はほとんどありません。旅の始まり、木曾の道中であつた「道心の僧」とのエピソードだけと言つていいくらいです。この紀行を漫画化したすぎ大和さんの「まんが松尾芭蕉の更科紀行」（河出書房新社版）で描き出された世界をきつかけに、原文を読み返しているうちに、この坊さんとの出会いが、次の「奥の細道」への旅に自信を与えたかもしれないと思つたようになります。

下に「更科紀行」の全文を掲載しました（以下に紹介する原文の部分は太字）。冒頭で「吹き始めた秋風にしきりに誘われて、さらしなの里の姨捨山の月を見よう」と美濃を旅立つた「更科紀行」というタイトルが付いたのですが、この段落の最後には「ものごとのしどろにあとさきなるも中々にをかしきことのみ多し」と、いろいろ大変なことがあつたけど、面白いことばかりがある旅だつたと打ち明けています。この段落はいわば紀行の前書きで、続く段落でその「をかしき」こととは何かを全面展開しているのが「更科紀行」の特徴です。

一段落目の冒頭に早速「六十歳ぐらゐの道心の僧」という言葉が見え、その「をかしき」を体験させてくれた人物として登場させています。「道心」とは「仏道を修めよう」と思つた」という意味で、「僧」だけだと文章に落ち着きがないので、頭につけたと思ひます。芭蕉はこの僧の風体について「おもしろげもをかきげもあらず、ただむつむつとしたるが、腰たわむまで物負ひ、息はせわしく、足はさきむやうにあゆみ来たれる」と、難しい顔をしながら荷物をたくさん背負つて苦しそうに歩いている姿を紹介しています。

原文は文語体なので読み始めたころは深刻な感じを受けたのですが、すぎ大和さんの漫画では、はげ頭に豊かな白い鼻ひげ、なんともユーモラスな味のある老僧なのです。江戸時代ですから六十歳といえはもう老人だつたでしょう。こうしたキャラクターが与えられると、その後の芭蕉がした「道心の僧」体験にもそのキャラの性格が反映されます。

道心の僧が面目躍如するのが、二段落日。芭蕉はこの坊さんと宿を同じくして、夜は一緒に部屋にいたようです。そのとき芭蕉は昼間に作った俳句を作ろうとするのですが、うまくいかず、頭を叩いてうめいていると、道心の僧がこれからの旅のことが心配で気が滅入つているのにちがいないと勝手に解釈して、説法をい

ろいろ聞かせるのです。芭蕉はこれに「風情のさはりとなりて、何を言ひいづることもせず」と閉口したようですが、すぎさんの漫画では、それも楽しんでしまつている芭蕉の余裕のある姿が描き出されています。僧は芭蕉だということを知らなかつたに違いありません。芭蕉も名乗らなかつた、いやまた名前が全国に知られる前に時代ですから、名乗つても僧には分からなかつたかも知れません。

この僧との出会いで芭蕉が一つ達観したとがうかがえる記述があります。二段落の末尾「世の常に一めぐりも大きに見えて、ふつつかなる時勢をしたり。都の人は、かかるものは風情なしとて、手にも触れざりけるに、思ひもかけぬ興に入りて、晴碗玉冠の心地せらるるも所がらなり」。先に紹介した僧との一連のやりとりがあつて楽しくなり、酒を飲もうと思つて宿から出された杯は大きく、田舎っぽい時鐘が施されているだけで、それが中国の美しい磁器にも見えたという意味です。田舎のものが見方次第で美しく見える、地域の魅力を再発見する現代のもの

の見方に通じます。酒を酌み交わす直前には「とてもまぎれたる月影の壁の破れより木の間にくれにさし入りて、引板の音、鹿追ふ声、とろとろに聞こえける。まごごにかなしき秋の心、ここに尽くせり」と月の光が穴のあいた壁から差し込んでくるのに気づき、その風情への感動を披露しています。道心の僧の「俗」と月明かりの「聖」のコントラストが妙で、こんなところこそ真実の美があると、いう低い視線からの美を発見しているように思えます。

道心の僧に負けず劣らず面白いのが「奴僕」です。芭蕉は同行したのは弟子の越人ともう一人、芭蕉の身の世話をする役目があり、それが原文では「奴僕」と書かれているのですが、この奴僕は権七という名前だつたともされ、人柄はおおらかだつたようです。木曾山中の崖が怖くて芭蕉が馬に乗れないので代わりに権七を乗せたら、権七は怖がるどころか居眠りをするほどでした。

芭蕉は権七のその姿からも一つ達観しました。「仏の御心に衆生のうき世を見給つてもかかる事にやと無常迅速のいそがはしさもわが身にかへり見られて阿波の鳴門は波風もなかりけり」。文末の「阿波の鳴門」は現在の徳島県鳴門市と兵庫県の淡路島との間の鳴門海峡のこと。海面差が大きいので渦巻きが起きること知られますが、芭蕉は木曾の山越えを道心の僧や奴僕たちとすることで人生の危うさなど仏教の教えが一つ一つ納得でき、こうした旅の経験をすれば、鳴門海峡も波が立っていないくらい平穏な状態に見える言っているような気がします。芭蕉は、道心の僧など旅の偶然の出会いや見聞を大事にしていけば、何も怖くはない、それが自分の文芸の確立には欠かせないと確信したかもしれせん。

▽自分で歩いて完成

長楽寺周辺で月見をして作った「佛や姨ひとりなく月の友」の句は、このエッセーの後に添えられているだけで、当地を歩いた際の風情は記していません（俳句についてはシリーズ76、80を参照）。越えた峠の一つに「猿が馬場」の名前を挙げていくくらいです。最初に残念だつたのですが、芭蕉にはさらしな・姨捨についてだけを記した俳文「更科姨捨月之弁（同8、8を参照）」が別にあるので、あえて記さなかつたかとも思つたようになります。「更科紀行」で描かれていない道中の世界は、読者が自分で歩き自分なりに作ればいいのではありません。幸い、芭蕉が歩いた善光寺街道と姨捨近道が整備されています（同9を参照）。

発行 二〇〇九年七月十五日
編集 さらしな堂
（代表・大谷善邦）
〒三八九・〇八二三
長野県千曲市大字若宮一八四・六
（旧更級郡更級村）